

巻 頭 言

東京大学大学院数理科学研究科

小林 俊行

数学は代数・幾何・解析の3つに大別するという伝統的な見方がある。しかし、私は「数学は一つ」と考えたい。数学は、内在する本質を見抜き、そこから新たな素材を生み出し、さらに複数の異分野が思いがけなく結びついて飛躍をとげてきたものであり、このことが数学の「学問としての生命力」の源泉となっていると思うのである。

もちろん、一人の研究者としては、自分が深く関わることのできる分野は極めて限られている。その一方で、他者の論文を理解するには非常に時間がかかる。遠い分野で新しく生まれた素晴らしい理論を、なんらかの形で「感じる」ことができないだろうか？ その道のプロでなくても、芸術やスポーツでは、とびきり優れたものに触れたときに、何か心に響くことがある。数学においても、専門外の素晴らしい理論に刺激され、思いがけないインスピレーションが芽生えやすいような「場」があってもいい。

「高木レクチャー」が10周年を迎えた。この非日常的な講演会を2006年に創設したとき、その理念として「数学は一つ」という考え方を大切にしたい。高木貞治先生のお名前は、「数学の発展に日本が貢献するシンボル」として講演会の名称に使わせていただいている。高木レクチャーを楽しみにしてくださっている方は少しずつ増えてきているようで、最近では、毎回、150人-200人くらいの方が参加されている。理想を掲げて大きな集会を運営するには気力が必要であり、仙人のように自分の研究だけに没頭したい気持ちもあるが、これも数学のコミュニティへの恩返しと考えている。今回、数学通信の編集部から高木レクチャー10周年をテーマとした巻頭言を依頼された。読者の中には、参加されたことがない方も多くいらっしゃると思うので、高木レクチャーの「形」と私がこの講演会を創設したとき以来「願っていること」をご紹介しますと思う。

1. 高木レクチャーは、週末に開催する講演会である。原則として初夏と晩秋に行う。
2. 聴衆は、その分野の専門家とは限らない数学者から若手研究者・大学院生まで幅広く。

週末に開催するのは、専門外の講演会に参加しようとする平日では都合がつかない方が多いだろうと考えたためである。また、週末の解放感の中で楽しく参加していただきたいという気持ちもある。

そして、もっとも大切なのが講師である。

3. 高木レクチャーでは、第一線の数学者を招聘し、気概に満ちた講演を行っていただく。

道を切り拓いた数学者よりも、それを学んだ後続者の解説の方がわかりやすいことも多々ある。しかし、高木レクチャーでは、わかりやすく噛み砕いた説明よりも、創造の現場から何かしらのエネルギーとインスピレーションを感じることにこだわる。

世界中で次々と生まれる素晴らしい数学の理論。それを生み出す人々の年齢層は幅広い。高木レクチャーでは、26歳のScholze氏から、傘寿を越えたMalliavin氏、Vershik氏まで、さまざまな年齢層の数学者が講演をされてきた（年齢は来日時）。日本には研究者があまりいない分野の第一線の方も、高木レクチャーでは積極的に招聘を試みている。

高木レクチャーで招聘する数学者は当然のごとく非常に忙しい。当日の朝に空港に到着する方もいらっしゃる。そんな先生方に、とびきりの講演をしていただきたい。主催者として最大限に力を注いでいるのは、その先生方がどうしたら意気を感じてくださるか、ということである。気概に満ちた講演の中から、別の新たな創造のインスピレーションが引き起こされる。このためには、きちんとしたシステムを作り、そして、主催者が心を砕かねばならない。また、参加者同士の会話や議論の時間も大切にしたい。これらすべてが、会場に「良い空気」をもたらす。自分自身がいろいろな講演に招かれたときの経験を振り返りつつ、多くの方と相談しながら、高木レクチャーの「形」を決めていった。

- ・ 各講演者に20-60ページの原稿の執筆を依頼し、冊子に綴じて講演当日に配布する。
- ・ 各講演者は、同じテーマで1時間の講演を2つ行う。
- ・ ゆったりとしたコーヒータイム、食事を控えめにした会話主体の立食パーティ。

他にもいくつかの細かい「決まり事」があるが、それらは、非日常的な催しを継続的に続けるための工夫でもある。講演者が書き下ろした研究総説の原稿は、講演後に加筆修正され、さらに査読を経てジャパニーズジャーナル（JJM）から出版される。

「高木レクチャー」の運営は組織委員と日本数学会を中心として、ジャパニーズジャーナルの出版社、各開催地の事務の方々、ビデオアーカイブス・プロジェクトのメンバー、学生のボランティア達によるチームで支えられている。この素晴らしいチームのおかげで、非日常的な講演会である「高木レクチャー」では、講演者も参加者も心地よい雰囲気の中で数学に没頭できる。毎回のことながら、ありがたく、頭が下がる思いである。

講演の当日に配布する冊子の表紙には北斎の浮世絵を使っている。19世紀後半にジャポニズムが西欧の新しい芸術運動のきっかけになったように、オリジナルなものは、さらなる創造のインスピレーションを引き起こし、創造の連鎖が生まれる。高木レクチャーが、数学における「創造の連鎖」を生む場を提供し続けることを願っている。